

ひとひとひと
男・女・人
おしゃべりざろん



男であることの 損と得 (2)

今回は男であることの「損」に目を向けてみましょう。

★男なんだから、シツカいね

男性が「損」を感じるのは、「男らしさ」を強要されたときに見られるようです。例えば「経済力を求められる」「出世を期待される」「仕事の責任を取らされる」「体力的にきつい仕事をさせられる」「弱音を吐けない」



「人前で泣けない」「セックスでリードしなければならない」などです。男としての強さや忍耐力、リーダーシップを求められ、それに答えられなければ、「能力のない男」「できない男」として切り捨てられていくことへの恐れが現れています。

★男社会の今昔



日本の右肩上がりの経済成長が永遠に続くと思われていたころ、男は「企業戦士」と呼ばれ、一流の学校を出て一流の企業に入り、家族を養うために仕事一筋に生きることが、男の美德とされていました。「24時間働けますか」というCMもありました。しかし時代は変化し、

企業倒産、リストラの嵐が吹き荒れています。企業は「終身雇用」から「能力主義」へと経営方針を変え、競争社会はますます熾烈になっています。会社のためにすべてをささげて働いてきたにもかかわらずリストラで解雇され、それを家族に告げることもできず、公園で頭を抱え込む男性の姿はいったい何を意味しているのでしょうか。

★男だつてマシなのよ

男であるが故に、競争を強いられ、さらに男であるが故に競争に勝つことを求められ続けてきた多くの男性。



「男性優位」社会の裏には、組織や制度の中で自分らしさを抑え、弱さを見せることもできず、常に競争にさらされてきた男性のつらい現実が見え隠れしています。中高年男性の自殺の増加は、男の「損」の最たるものではないでしょうか。

「おしゃべりざろん」は白根学習館ホームページでもご覧いただけます
(<http://pc2.gakushyukan-shirone-unet.ocn.ne.jp>)



十月十三日、白井地区まつり「狸の婿入り行列」が赤渋河川防災ステーションなどで行われました。これは、白井地区の新たな祭りとして、白井地区まつり実行委員会が六月から計画していたもので、基となる「狸の婿入り」の話は、栗賀繁さん（上浦）が創作しました。物語は、白井の白蓮郷に流れ着いた狸のポン太が、村人に助けられた恩返しをするため農作業を手伝い、その後人間の女性と結婚をして幸せに暮らすというもの。主人公のポン太とその花嫁は、九月に結婚したばかりの竹内正行さん・朋江さん夫妻（下八枚）が選ばれました。

祭りは、子狸や狸を装った地元の子どもや大人たちの行列が「婿どん婿どんやっってきた」と歌いながら、戸石公会堂の周辺と赤渋河川防災ステーションを練り歩いた後、二人の披露宴などが行われました。会場に詰めかけた約五百人から祝福され、少し照れくさそうな正行さんと朋江さん。最後に正行さんは「皆さんから祝ってもらい、心に残るすばらしい結婚式となりました」とあいさつしました。



九月三十日、市内小中学校で白根産農産物をすべて食材に使った給食

が提供されました。これは地元産の農産物を地域で消費する「地産地消」の取り組みの一環。これまでも白根産コシヒカリや旬の野菜を給食に取り入れてきましたが、白根産だけの献立は初めて。枝豆ごはん、マイタケ、シメジ、にんじん、じゃがいも、葉ネギの入ったキノコ汁、白根ポークのとんかつと二十世紀梨が登場しました。庄瀬小学校の一年生のクラスでは、「今日の給食おいしい」「この間しろねの農業勉強したよ」などと、楽しく話しながら食べていました。

おいしいね今日の給食

白根産農産物100%の学校給食

TOPICS



千野さんは大正二年生まれの旧新飯田村出身。彫刻の勉強のため上京し、昭和十七年の院展で初入選。以来、日本美術院大観賞・白寿賞など数多くの賞を受賞しました。また、昭和五十五年まで東京芸術大学教授を、今年四月まで同大学名誉教授を務めました。故郷を五十年あまり離れていた千野さん。平成九年にカルチャーセンターで開催した作品展や新飯田小学校での講演会などで、何度か故郷である本市を訪問していくうちに、あらためてふるさとへの思いを再認識したそうです。

千野さんは「手紙をいただいたとき、ふるさとに寄せる先生の気持ちに感激するとともにうれしく思いました」と当時を振り返ります。また、「全国的にも有名な千野先生のすばらしい作品を、市民の皆さんに見てもらおう機会をぜひつくりたい」とも話してくれました。



四月に八十九歳で亡くなった、白根市出身で東京芸術大学名誉教授・彫刻家の千野茂さんの作品が、市へ寄贈されました。寄贈された作品は、一九五〇—二〇〇〇年に製作された石こうやブロンズの裸婦像など全三十八点。九月に東京都の自宅アトリエから作品が一括して搬入され、現在、市で保管しています。

ふるさとへの想いを託して 故千野茂さんの作品市へ寄贈



十月八日、白根学習館でイージー・リスニング界の巨匠「レイモン・ルフェーブル・オーケストラ」の公演が開催されました。これは完成度の高い芸術を鑑賞する機会を全国各地で提供しようと、宝くじの収益金により実施されているもの。通常の半額程度の料金設定とあって、満員の聴衆が会場を埋めました。公演はシャンソンや代表曲「シバの女王」など、全二十四曲の演奏とパフォーミングで観客を魅了。来場者は「音に迫力があって、すごく良かった。ぜひまた開いてほしい」と笑顔で話してくれました。

名曲に酔いしれる

宝くじ文化公演「レイモン・ルフェーブル・オーケストラ」

歩道の景観をきれいに

白根 保育園



十月三日、国道8号の白根小学校前歩道の花壇に、白根保育園の園児二十人が、国土交通省の職員と白根電線共同溝工事関係者とともに、ガーデンシクラメンやパンジーなどの苗二百株を植えました。これは、草花を植えることを通して、道路に親しみや公共空間の美化に関心を持ってもらおうと、国土交通省黒崎維持出張所の主催で行われたものです。この日、白根保育園を訪れていた白根第一中学校の生徒も一緒に参加して、国道8号の歩道に彩りを添えました。